

---

# 刹那に生きる

大きな木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刹那に生きる

### 【Nコード】

N0197Q

### 【作者名】

大きな木

### 【あらすじ】

とても急いでいる人、何かにつまづきそうな人、奇蹟を信じている人。みんな、好き勝手に生きている。

## バイパス

時間がない。

時計を見る。秒針が進んでいる。よく見ると長針も少しずつではあるが動いているのがわかる。短針は、実際は動いているのかもしれないが、動きを感じることはできない。

いけない！そんなことを確認している場合ではなかった。

そんな、時計の針に気を取られている場合では、そう、なかった。今の僕には、時間がない。とにかく、ない。

僕は手に持っていた懐中時計を胸ポケットにしまい、走った。

否！走っているのは僕ではない！

「車だ！」

「なに！？びつくりした」

僕の隣で 運転席で体を浮かせながらオーバーなりアクションを取ったのは、千石蒲公英という男だ。オーバーなりアクション、て何だろう。どこからがオーバーなんだろう。

しばらく無言で前を向いていた蒲公英が、僕の方を向いて話し始めた。「昔話をしようか？」と。急にだ。しかも、こんなに急いでいるときに、諦めの代名詞とも言えそうな「昔話」をしようだと。

「だめ。昔話はだめだ。どうせするんなら、いや、本当に今話しがしたいんだったら、未来話にして」僕は必死に抗議する。あまりに必死過ぎて、後半の記憶がない。

「未来話ってなんだよ」と蒲公英。

「未来話ってなんだよ」と僕。

未来話って何なんだよ。昔話みたいなものか。

「おまえが言ったんだろ」と蒲公英。

そこでまた、沈黙。気持ちが悪くなると、心臓の鼓動が速くなり、いつもより時間の感覚が遅くなる。沈黙が長く感じるはそのせいだろう。

「みらいみらい、おじいさんとおばあさんが仲良く暮らしているでしょう」

蒲公英が口を開いたかと思えば、そんな奇怪な嘯を始めた。間の抜けた喋り方だ。僕は、とりあえず聞き入ってみる。

「そして、おじいさんはきっと、芝刈りに行くでしょう」

占い師のモノマネかもしれない。無論、聡明な僕は、それが未来話であろうことなどすぐに気づいていたのだが、特に気のきいたコメントも思いつかないため、彼に今後の展開は委ねることにした。それに、今は時間がない。

「おばあさんといえば、川に洗濯に行くことでしょう。おそらくおそらく、だって。好き勝手である。やりたい放題だ。第一、未来に起こることを、まだ起きていないこととして、予想している風に話して何か意味があるのだろうか。いや、意味なんて考えてはいけないのだ。僕らの場合は。」

そうこうしている間に、僕らを乗せた車はバイパスを降りていく。僕らは、とにかく急いでいる。

## 喫茶店

私は、ひとり喫茶店で本を読んでいた。「ドリア」という、ハードボイルド小説だ。我ながら、渋い。しかめ面を試してみた。うん、渋い。コーヒーから、空気との温度差のせいか白いもやが上がっている。

「あの」

「なんだい？」

小説の中に浸っていたせいか、不意に女性に話しかけられた私は、思わずハードボイルドな返事をしてしまった。若いウェイトレスが立っている。いや、この言い方は古いか。ウェ이터というのが正解だろうか。アルバイトらしいノリのきいた制服を着ている。私は本を閉じた。

「その…それ」

そう言いながら彼女が差し出した指の先にはコーヒーカップがある。私の飲みかけのコーヒー。

「これが、なにか？」

普段の私はどんな喋り方をしていたっけ。少なくとも今のようなものではない。

バックグラウンドに流れるのは誰かのクラシックがアレンジされたジャズ。私にわかるのは、それがバツ八ではないことぐらいだ。

「全部飲んで」

「へ？」

多分、ひどく間抜けな声が出たと思う。ハードボイルドが聞いてあきれれる。「勝気な娘だということがわかった。それだけだ」とでも言えればよかったのかもしれない。しかし第一、今の私の容姿といたら、ジーンズにシャツというカジュアルなスタイル。これでバーボンでも傾けていればまだ救いようがあったかもしれないが、私が飲んでいるのはコーヒーである。しかも、年端もいかない娘に

それをすべて飲めと言われているという、不思議。ああ、ハードボイルドになりたい。

「お願い、全部飲んで」

と、今度は少し目を潤めてそう頼む彼女。

これは一体どういう状況なのか。私は基本的に、初めてのことは慎重になる。昼下がりの喫茶店で、スタッフの女の子に、注文したコーヒーを全て飲めと言われる。これはきっと私の人生で初めての体験に違いない。さっきからいくら記憶を検索しても、同じ状況ないし、似たような状況すら出てこない。

「お願い……」

「わかった、わかったから」

更に真摯になる彼女の声色に、さすがの慎重な私も頷かずにはいられなくなった。

今まで飲んでいたコーヒーを飲み干すだけじゃないか。何をそんなに抵抗する必要がある。いや、そもそも私は抵抗をしていたのか。していないのではないか。ああ、そうか、私は単にコーヒーを飲みたいだけなのだ。とマインドコントロールを試みる。いくらか、気持の整理はできた。

それでは、いただきます。頭で言って口には出さずに、目は彼女の目を捉えて私はカップを掲げた。そしてコーヒーを口に付ける。

「ドキドキ」

なんだって。ドキドキ？彼女がわざわざ口から発したその、心臓の鼓動音を示唆するような擬音語に私の方がドキマギする。彼女は何を“ドキドキ”しているのだろうか。

コーヒーは、熱かった。途中、何度も頭に“はてな”が浮かんだ。なぜ私は人でにぎわう喫茶店で女の子に見つめられながら熱いコーヒーを頑張って飲み干そうとしているのかしら、なんて。

さあ、あと少し。

さあ、あと一滴。

心なしaka私もドキドキしてきた。彼女をちらりと見る。真剣な面

持ちだった。

私は既に空になったであろうコーヒーカップを口に付けたまましばらく制止してみた。もうカップからは私の鼻息しか出てこない。

「飲めました？」

私が飲み終わったのに気付いたのか、彼女は聞いてきた。

私は静かにカップを置く。

置いて、何気なくカップを覗いた。本当に何かの予感がしたとかではなく、なんとなく、癖のようにそうした。

そして、瞬時に彼女の顔を見た。

カップの底にあつたものにはつとした私の顔は滑稽だっただろう。ハードボイルドなんてかけらもない。しかし彼女はその瞬間なぜかトレーで顔を隠していて、私の顔を見てはいなかった。

そして、衝突音とほぼ同時に、誰かの悲鳴が喫茶店内に充満した。

私はと言えば、トレーからやつと目だけをのぞかせた彼女に対して、できるだけ精悍な表情を作るのに終始していた。

## 街路

なぜか僕は今日、究極的に、転倒しそうな予感がしていた。比喻ではない。実際に僕の肉体が転びそうな予感がしていた。

もしかしたら何かの力に目覚めたのかも知れない。そう、なにか危機を予測するような。腰のあたりから足に向かって微弱な電流を浴びたような感覚がある。

そして脳内にははつきりと僕が転倒するシーンが写し出されていた。

休日の人が多い街を僕は歩いている。

これだけ転ぶことを周到にイメージ出来ていると、もうさっさと転んでしまいたい気すら湧いてきた。

前から、ものすごく体躯の大きい男が歩いてくるのが見えた。プロレスラーかラグビー選手のような風格がある。

瞬時に僕は思った。きつと、あの男にぶつかって、僕は吹っ飛ばされるに違いない。そして、大仰に転ぶ。転ぶときは何と言おうかなんて悠長なことを考えもした。「あへー」か「あれまー」か。転ぶことが予測できているのだから、できるだけそいつた演出に気を回したい。

男との距離がみるみる縮まってくる。僕はむしろありがたい気持ちすらしてきた。きつとここでこの僕のもやもやとした不安は払拭されるのか、と。

とうとう男と衝突する寸前というところまで僕は近づいた。さあ、右に転ぶか、左に転ぶか、その選択しか残っていない。さあ。

それ！ひと思いに僕は男に突っ込む。

「あれまー」

僕は、その巨軀をまるで糸のようにさらりと翻した男の脇を、思い切り通り過ぎて行った。

地面へのダイブ。



一瞬の空中遊泳。

完全に身を男に委ねていた僕は、見事に地面に激突した。

膝から落ち、両手をコンクリートで擦った。寒さで敏感になっていた肌が悲鳴を上げるのを感じた。

しばらく立てずに蹲っていると、大男が心配そうな声をかけてきた。

「大丈夫ですか？一体どうしたっていうんです」

なんか、優しそうな人だな。僕はそう思い、しかしまだ声を出せずにいた。

そして、ことは立て続けに起こった。

まず強烈なブレーキ音がした。

そして、轟々たるスリップ音。

男が僕を軽く担ぎあげ、投げた。

僕の視界が回転する。

なにかが衝突する音。

そして地面へ再び叩きつけられる。

幸い頭は打たずに済んだが、痛いものは痛い。

恨めしい気持ちで男を探すが見当たらない。

次いで、何かを言い争うような声が聞こえた。

「お前が変なはなしに夢中になっているから、こんなことになった」

「もう少しいいところだったんだ。これから、『きっと桃太郎は鬼を退治するでしょう』というくだりだったのに」

「ああ、畜生、時間がないうつてのに」

声の方を見ると、電柱にぶつかった軽自動車の脇に二人の男が立っていた。顔が似ている、というかほとんど九割方、同じ顔をしていた。双子か。

事故か。

もう、とりあえず、転べたのだからいいではないか、と僕は思うことにした。

## 喫茶店2

「大変だ」ウェイターの彼女が呟く。

私は彼女の目を見ていたのだが、彼女は私のことを見ていなかった。この瞬間、店中の誰もが店の外に釘づけになっていた。

私は、これはきっと決断を迫られているのだということを知っていた。

というより、そんなものはコーヒークップを覗いたときにすでに決まっていた。今はただ何かに対して決別をしているというだけの時間。あるいは不幸な運転手への黙祷か。

店にいる人たちの反応から、外の事故が派手であることがわかった。私は事故をこの目で確認せずに立ちあがる。そして未だ呆然と目を見開いている彼女の目を覚ますように、その手をとった。

一瞬我に帰ったような表情を見せた彼女は、トレーを足元に落としていることにも気づかず、歩きだした私の後に着いてきた。店内はまるで時間が静止したかのように、空気すら動いていないような気配もある。

このときの私の瞬間的な行動力は、もしかしたらハードボイルド小説に影響されているのかもしれない、などとずれた動機を考えもするが、取り払う。とにかく今は進むしかなかった。

店を出た私たちは、喫茶店の前の電柱に突っ込んだ軽自動車を眺めていた。

「大変だ」彼女が再び呟いた。

「そういえば」そこで私はふと思いついた。「キミ、名前は？」

「田子楓」

「タツコ？」

「そう、楓」

聞きたいことは他にもたくさんあったのだが、とにかくこの場を

離れたかった。

「行こうか、えっと、田子さん」

「楓にして」

どうも、私の方が翻弄されている気がして仕方がない。しかしそれはコーヒーを飲み始めた時点で、いや、私があのお喫茶店に入った時点で決まっていたことだった。それをどうこうすることはできない。おとなしく従うほかないだろう。

私たちは事故の現場とは逆の方向に歩きだす。集まってくる野次馬を掻き分けて逆走するのは、まるで事件現場から逃げる犯人のよくな気がした。車道には車が溜まり始めている。

事故は、見た目の異様さや衝撃音の激しさに比べると大した被害は出ていないようだった。運転手は認められなかったが、恐らく大した怪我はしていないだろう。幸いと言うのか、歩行者に当たった様子もない。おかしな言い方だが、運がよかったと言う他ない。

これからどこへ向かうか。

彼女に訊ねてもいいものか、私は正直迷っていた。

「まず、して欲しいこと」彼女が不意に言葉を発した。

私は驚きで肩を一瞬痙攣させた。彼女に覚られたかもしれない。

早く彼女のテンポに慣れることが必要だ。

「あの事故の原因を、調べる」

「あの事故？」

「あの事故」彼女が後方を指す。

もしかしたら、因果関係なんて後から考えたこじつけなのかもしれない、とこのとき私は思った。彼女がたとえわけのわからない指示をしてきたところで、私はそれを守るしかないのだし、その結果何が起ころうと、私は受け入れるしかない。だから今は、あの事故の原因を調べるしか、私には選択肢がなかった。

さて、まず何から始めるか。彼女からの新しい指示が来る前に行動する必要がある。

それが今の私に唯一残された自由の形式かもしれないのだから。

## 街路2

「あーあー、間に合わなかったらお前のせいだ」

「なに！聞き捨てならないな。俺のせいだと」俺は、隣でぶつくさ  
と文句を繰り返す橘向日葵という男を睨みつけた。

俺と向日葵を乗せた車は、電柱に突っ込んだ。運転していたのは  
俺だったから、向日葵は当然俺を責めたいだろう。しかし、俺は断  
じて悪くない。あの状況で事故を回避できる人間がいたら会ってみ  
たい。

「サインをもらってもいいくらいだ」

「なんだよ、サインって」向日葵が喚く。

「あつちにすつ飛んでいったでつかい鳥を見ただろ？」

「鳥？鳥なんて見てない。あー、きつと間に合わないだろうな」向  
日葵は取りつく島もない。

俺は、鳥を見た。とんでもなく大きな鳥で、そいつはバイパスか  
ら降りた俺たちを乗せた車に向かって一直線に飛んできた。あまり  
に巨大だったため、俺は驚き、慌ててハンドルを切った。車は横転  
こそしなかったものの、それなりのスピードで交差点の中心まで行  
き、止まった。そこまでなら、まだ問題はなかった。

「じゃあ、なんだって急に車が動き出したのかわかるか？」俺は向  
日葵に訊ねる。

「お前がアクセルを踏んだんだろ？」

「違う。俺はアクセルを踏んでいない。車は急に発進したんだ。い  
や、ブレーキを踏んでいたんだから発進したわけじゃないか」

俺はふと思いつく。そうだ、交差点内で停車してからはブレーキ  
を踏んでいたはずではないか。そういえば、タイヤが転がった感触  
もなかった気がする。

「あ！なんだお前ら」向日葵の声が俺の肩辺りを通り過ぎて行っ  
たのを感じた。

俺は振り向いてそれを確かめる。怪しい男女が、車の後ろで何やら話していた。怪しいと感じたのは、女がエプロン姿だったためかもしれない。どこかの喫茶店の店員を彷彿とさせる。

「これ、後ろが不自然に凹んでるな。どこかにぶつけたことがある？」男が訊いてきた。喋り方こそ丁寧だが、人を小馬鹿にしているような感じがする。妙に冷静さを演出しているせいか。

「なんだと、こっちは急いでるんだ。お前ら誰だ」何をいきり立っているのか俺には理解できないが、向日葵は不躰な態度を依然として突き通していた。

「あなた、うるさいな」今度は女が突っかかってきた。こいつは、なんの芸もなく、刺を出しっぱなしにしている。

なんとというエキセントリックな人たちだろう。

「とにかく、警察を呼んでおこう。俺らじゃどうにもできないだろう俺はなんとか単純な作業だけの状況に持ち込もうと思いついて、そう提案してみる。

「だめだ、逃げよう。警察なんて呼んだら絶対間に合わなくなる」と向日葵。

「そうね。賛成。私たちも、ね」と喫茶店員風の女。

「そうだな、君たちだけでは心配だから私たちも行こう」と演者気取りの男。

なんとというエキセントリックな人たちだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0197q/>

---

刹那に生きる

2011年1月12日23時37分発行